

〔平成 29 年度 博士学位論文要旨〕

中・日母語話者同士の会話展開の対照研究  
—初対面場面の会話データをもとに—

言語教育研究科 日本語教育学専攻 博士後期課程 唐 瑩

(論文要旨)

筆者が来日した後、日本人の友人と自由な雑談をするときに、日本人の友人の返事のしかたが筆者の母語（中国語）の会話で慣れているやり方とは違っていたため、会話がなかなか持続できなかった経験がある。そこから、中国語会話と日本語会話が一体どのように展開するのかという疑問が浮かび上がった。

それを出発点として、本研究では、「会話参加者間の情報交換のあり方」に焦点を当てて、初対面の日本語母語話者同士と中国語母語話者同士がそれぞれどのように情報交換をしながら会話を発展するのかについて分析をおこなった。具体的には、次の二つの観点から考察をおこなった。

- ①交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか）
- ②情報交換の様式（情報がどのように交換されるか）

「①交換される情報の内容」について、第3章では、三牧（1999）の「話題」の定義に従い、中国語会話と日本語会話の会話内容を区分し、上位の「話題」を「大話題」、下位の「話題」を「小話題」として分析をおこなった。

話題数から見ると、日本語グループでは大話題数は少ないが、一つの大話題に含まれる小話題が多い。一方、中国語グループでは開示された大話題数は多いが、一つの大話題に含まれる小話題が少ない。

話題内容については、日本語グループ、中国語グループともに、「名前」「学年」「学科」「専攻」の選択率が高かった。【個人情報】の開示により、心的距離を接近させる傾向が見られた。また、両グループの母語話者のそれぞれの関心を持っているところが違うこと、また自分と他人のプライベート範囲の度合いが異なることにより、話題選択に違う傾向も見られた。中国語グループはよりプライベートな話題が開示され、人を中心とした情報開示によって親近感を与え、より積極的に人間関係を作る。日本語グループはお互いの領域に配慮しながら会話を進め、二人の接点を作ってから会話を展開する。

会話の開始方法については、日本語グループは「こんにちは」「はじめまして」などの

定型的言葉で会話を切り出すのが普通なのに対し、中国語グループには一人の話者がもう一人の話者の個人情報を聞くという直接質問の形で会話を切り出すことが多い。また、話題の開始方法について、日本語グループでは、叙述で始まる話題が質問よりやや多く、中国語グループでは質問で始まる話題が叙述より多い。

「①交換される情報の内容」については、第4章で「自己開示」に焦点を当てた分析も行い、初対面の相手に対する自己開示の内容は個人差があるものの、日本語会話と中国語会話で自己開示スキーマ（三牧・難波，2010）に相違があることが分かった。今回の調査では、初対面の相手に対して、両母語話者の自己開示の回数はほぼ同じであるが、中国語母語話者は「主観的自己開示」の回数がやや多く、日本語母語話者は「客観的自己開示」の回数がやや多かった。中国人学生は「大学院入試」、「就職」といった将来志望の内容を、日本人学生は「サークル」、「ゼミ」、「卒論」といったキャンパスライフに密接な関係がある内容を開示することが多く見られた。

感情や見解などの主観的な内容に関しては、両母語話者の開示のあり方に相違が見られた。中国語母語話者は感情を語る表現が豊富であり、それぞれ「喜怒哀楽」の感情を開示する。また、一つのテーマについて、まとまった話で積極的に互いの意見を交換して他の話題に移行することが多い。一方、日本母語話者の特徴は心情を開示する時、スピーチレベルのシフトで過去の心情をそのまま引用したり、「うれしい」「辛い」など形容詞だけで、発話瞬間に生じた感情を生で表出したりすることで、対話の相手との距離を縮めることが多い。また、相手の開示に同感を示し、協同的に開示することが多く、言葉の表現がより簡潔的である。

「②情報交換の様式」については、「新情報の出現パターン」という観点から次のことを述べた。

会話における「新情報の出現パターン」を、①「回答式」（情報要求に回答する形で新情報を提供する）、②「双方式」（相手が先行発話で提供した新情報に関連する別の新情報を提供する形で新情報を提供する）、③「自発式」（相手が相づち発話をおこなったのに続ける形で自発的に新情報を提供する）に分けると、中国語母語話者は「双方式」、すなわち相手の情報提供に合わせて別の情報提供を行うことが多く、日本語母語話者は「自発式」、すなわち相づちに続けて情報提供を続けることが多い。

また、「回答式」に先行する質問発話に注目すると、中国語会話では「確認要求」が比較的少なく、「判定要求」と「説明要求」が同程度出現したのに対し、日本語会話において「判定要求」がきわめて高い頻度で用いられており、「確認要求」も中国語会話より日本語会話のほうが多く用いられていた。これは、日本語会話において「回答→回答内容の真偽確認→回答（新情報の確定）」という形で用いられる「回答式」が多いためである。

「回答式」、「双方式」、「自発式」の連鎖のし方について見ると、中国語会話で「双方式→双方式」の連鎖が多く、日本語会話では「自発式→自発式」の連鎖が多いことがわかった。「情報提供者」と「情報受信者」の役割交替も日本語会話より中国語会話のほう

が頻繁に起こる。一つの話題の中での「情報提供者」あるいは「情報受信者」の役割交替のパターンを、①「保持型」（一つの話題の中で情報提供者あるいは情報受信者としての役割が一貫して保持されるパターン）、②「回帰型」（一つの話題の中で話者の役割が一回以上交替するが、最終的には元の役割に回帰するパターン）、③「放棄型」の三つに分類してデータを観察した場合でも、中国語母語話者は「回帰型」と「放棄型」を多用するのに対し、日本語母語話者は「保持型」を多用することが分かった。日本語の会話は、会話参加者のいずれか一方が情報を提供者として話題を展開させ、もう一方が相づちなどでそれを支えるのが基本であるのに対し、中国語の会話は、会話参加者がともに情報提供者として話題を展開させるのが基本であると言える。

本研究で得られた知見は、先行研究で明らかにされたことと大筋で一致している。賈（2008）は、日本語話者は話し手の発話の関連する短い発話を入れる「ターン挿入」を多用して協力的な姿勢を示すが、中国語話者は簡単に発話権を譲らず、他人の話す権利より自分の権利を重んじると述べている。これは、中国語話者は相手の情報提供に合わせて別の情報提供を行うことが多い、日本語母語話者は相づちに続けて情報提供を続けることが多いということを、中国語会話では会話参加者が互いに談話展開の主導権をとろうとする、日本語会話では会話参加者の一方がもう一方の発話権を尊重するという形で述べたものと言える。

また、張麗（2010）では小集団ディスカッションの場面で、中国語グループの話者交替の回数が日本語グループより4倍になることを指摘しているが、第5章で述べたように、本研究のデータとした20分間の会話においても、日本語グループと中国語グループの話者交替の頻度はそれぞれ4.57、中国語会話では1.5であり、張麗（2010）の調査結果とほぼ同じであると言える。

難波・三牧（2010）は、中国語会話では、ある話題に関して自分の意見を述べ合った後に新話題に移行するという「議論型」のパターンが多く見られるのに対し、日本語会話では、ある話題が選択されたら、「導入→展開→収束」という順に次の話題に移行する「整然移行型」のパターンが多く見られたとしている。また、楊虹（2005b, 2005c, 2008）の一連の研究では、日本語母語話者は主に協力的なやり取りのプロセスを経て次の話題を導入する協同的転換パターンが多く見られる。中国語母語話者はそれ以外に、話題の終了ストラテジーがないまま話題導入をおこなう突発的転換、無表示転換も5割ぐらい見られるということを報告している。これらも、中国語話者は相手の情報提供に合わせてその場その場で情報提供を行うことが多い、日本語母語話者は一つの話題が収束するまで情報提供者と情報受信者の役割が固定された状態が続くということである。

会話の話題内容についても、大学生を研究対象とする張（2006b）は、日本の初対面会話フレームは開始部では形式をより重視し、5分間内の身上的情報収集は公的自己に留まること、台湾の初対面会話フレームは開始部で内容をより重視し、5分間内の身上的情報収集はより私的自己に関する内容に偏ることを報告しているが、本研究のデータ

に基づく分析でも、会話開始から5分間の間に出現するテーマは、日本語会話、中国語会話に共通して【個人情報】と【学校生活】が多かったが、中国語会話では【進路】と【すききらい】に関する話題も多く取り上げられていた。

その一方で、先行研究と本研究とで調査結果が異なるということも見られた。蔡(2011)は、社会人による日本語会話と中国語会話の話題内容を比較し、日本語会話は名前(姓)、居住(出身)地以外の個人情報の開示が少なく、仕事内容や専門、趣味・楽しみに関する話題に絞って、そこから派生した話題を客観的な立場から触れる話題内容が多いのに対し、中国語会話は仕事(職業)の給料や待遇に関する内容が多いことを明らかにしている。本研究の調査結果でも、中国語グループの学生は、「給料」「奨学金」「進路」といった相手のプライベートな領域に踏み込む話題が出現したが、日本語グループではプライベートな領域に深く踏み込み開示した例は見られなかった。しかし、その一方で、本研究の調査結果を見ると、日本語グループでも中国語グループでも、【個人情報】における「名前」「学年」「専攻」のような所属の話題項目、および「出身地」「実家」のような地縁に関する話題が多く選択されている。これには学生と社会人の違いが関わっている可能性が高い。また、本研究のデータを見ると、中国人の場合は友達と話すように会話をおこなおうとしているが、日本人は何かの試合を始めるときのようにあいさつをしてから会話を始めることが多い。会話で取り上げられる話題は、会話の雰囲気によっても変わる可能性が高い。

また、張(2006)、謝(2000)では、会話開始から5分間を対象とした分析を行い、出身地や住まいといった個人的情報は日本語会話よりも中国語会話のほうが多く出現したことを報告しているが、5分間以後にどのような話題が出現するかについては分析されていない。本研究の第3章と第4章では、会話開始から5分間の間の話題と5分間以後の話題とを比較し、次のようなことが明らかになった。

①20分間の会話では、中国語会話、日本語会話ともに【個人情報】、【他者】、【学校生活】、【すききらい】、【進路】、【社会】、【その他】という7つのカテゴリーの話題が出現したが、これらは会話開始から5分間の間にすべて出現した。

②会話開始から5分間の話題では、中国語会話のほうが日本語会話より多岐に渡るが、5分間以後は中国語会話と日本語会話で共通に出現する話題が少なくなる。

③【すききらい】は、中国語会話では会話開始から多く取り上げられているが、日本語会話では5分間以後に増加した。

④【個人情報】と【学校生活】は、日本語会話、中国語会話ともに会話開始から5分間の間に出現した。ただし、【個人情報】に関して、日本語会話では「年齢」「生年月日」「学歴」に関する情報は会話開始から5分間の間に出現したが、中国語会話ではこれらの情報は5分間以後に出現した。また、日本語会話では出現しなかった「自我」「給料」「職位」というよりプライベートな領域にふみこんだ話題が、中国語会話では5分

間以後に出現した。

大まかに言えば、日本語話者は会話の最初で詳しい【個人情報】を開示して自己紹介を行ってから【すききらい】の話題を取り上げるのに対し、中国語話者は特にそのような順序にこだわらずに、【個人情報】、【すききらい】といった種々の話題について会話開始から少しずつ話題展開をおこなっていると言える。

第3章で述べたように、会話で取り上げられる話題を「大話題」と「小話題」に分けた場合、日本語グループでは大話題数は少ないが一つの大話題に含まれる小話題が多いのに対し、中国語グループでは開示された大話題数は多いが一つの大話題に含まれる小話題が少ない。このことも、中国語会話に比べて日本語会話では「大話題」レベルの展開が重要なことを示唆している。第4章で述べたように、会話開始から5分間と会話開始から5分間以後の一人当たりの自己開示の平均頻度を見ても、「主観的自己開示」と「客観的自己開示」のバランスの変化は日本語グループのほうが大きい、これも中国語会話に比べて日本語会話では「主観的自己開示→客観的自己開示」というより上位のレベルの展開が重要なことによると考えられる。

会話には、「話題を展開させる」という側面と「会話参加者の関係を維持する」という二つの側面がある。井上（2013）は、中国語は会話の「会話参加者の関係を維持する」という側面を日本語より重視しているということを述べているが、本研究の知見をふまえると、本研究において明らかになった日本語会話と中国語会話の相違は、つまるところ次のようにまとめられるだろう。

- ・日本語は会話の「話題を展開させる」という側面をより重視し、中国語は会話の「会話参加者の関係を維持する」という側面をより重視する。

本研究では、第3章と第4章で「①交換される情報の内容（どのような情報が交換されるか）」という観点から、また第5章では「②情報交換の様式（情報がどのように交換されるか）」日本語会話と中国語会話の比較を行った。日本語は会話の「話題を展開させる」という側面をより重視し、中国語は会話の「会話参加者の関係を維持する」という側面をより重視するという上記の結論も、①と②の二つの観点からの考察を行った結果得られたものであり、本研究の価値もこの点にあると考える。

